〈研究ノート〉

樹皮を剥ぎ残すという言説をめぐって

－　更科源蔵の記録に基づく一考察　－

本　田　優　子

目次　はじめに

Ⅰ　丸剥ぎを示唆する記述
Ⅱ　樹皮を剥ぎ残すという記述
1　『分類アイヌ語辞典　植物編』
2　『ユーカラの世界』
3　二つの『コタン生物記』
Ⅲ　『コタン探訪帳』
1　樹皮採取に関わる記述
2　更科の理解
3　木幣と樹皮の関係性
おわりに

キーワード：アイヌ、アイヌ文化、アットゥシ、樹皮、更科源蔵

凡例：

- 文献の出典は（　）内に、著者、出版年の順に記した。詳細は末尾の引用文献リスト参照。「：」以下の数字は該当ページを示す。
- 引用文中の旧字体の漢字は新字体に変えた。
- 『コタン探訪帳』の引用中にみられる「／」は、改行を示す。（　）内は『コタン探訪帳』の巻数、ページ、調査地、調査年、語り手の性別である。アイヌ語の表記は原本通りとした。

はじめに

樹木の靭皮（内皮）繊維を素材として製作されるアットゥシ（樹皮衣）は、アイヌ文化における伝統的衣服の一つである。樹種としては、オヒョウ、シナノキ、オオバボダイジュ、ハルニレなどが挙げられるが、そのなかでもオヒョウの靭皮が最も衣服に適しているといわれる。

この樹皮採取に関して、たとえば『アイヌ民族誌』では次のように記される（アイヌ文化保存対

策協議会1969：250)。

> 皮剥ぎをするときの儀礼として、山の入口で神に祈るが、おひょうの木の前にスヅイナウを立て酒を供えて、樹皮すなわち木の着ている着物をもらうことを感謝してから剥ぐ。一本の木からは半側分だけ皮を剥ぎ、残りはそのままにしておき、木を丸はだかにしない。半分残した木には、剥いだ皮の一部で帯をしておく。これは残りの樹皮（すなわち木の着物）が風などでぬげないようにとの意味である。

また、萱野茂『アイヌの民具』にも以下のような記述がある（萱野1978：35)。

> アイヌは皮をはぐとき、ヤラ[(1)]の場合のようにどうしても幅が必要でない限り、立ち木が裸になるほどすっかりはぎ取るようなことはしません。皮をすっかりはいでしまえば木は枯れます。木の周囲の四分の一くらいずつはぎ、残りの皮が風に吹きとばされないように、はぎ取った皮の一部で帯をしめておきました。それは、木の皮というのは立ち木の神の衣であり、その神の衣の一部をいただいて自分たちの着物を作るものと考えるからです。

福岡イト子『アイヌ植物誌』では次のように記される（福岡1995：20）[(2)]。

> 木々が萌黄色の着物を着はじめると、アイヌモシリの女性たちは、木の着物を借りに山へはいる。「オヒョウの木の神様。いま、着物を作りますので、木の皮を一枚分だけください」と、お願いすると、アッニ（樹皮を取る・木）は、喜んで木肌を差し出す。南面の胴体の四、五分の一をいただき、着物が風に飛ばされないように樹皮の帯をしめ、「ありがとうございました。また、来年もお願いいたします」とお礼を述べ、タバコや食べ物を供えて山を降りる。

このように、樹皮を剥ぎ残すとともに、残した皮が剥がれないように剥いだ皮の一部で帯をするという記述は、いくつかの文献記述でも確認できるほか、近年のアイヌ文化に関する概説書やいわゆる普及啓発資料にも多く見受けられ(宮島1994、アイヌ文化振興・研究推進機構　2000ほか)、「その樹木が枯れないで回復できる限界を、アイヌの人たちは知りつくしていた」（宮島1994：50）とすら言われるに至っている。ただし、剥ぐとされる樹皮の分量は、『アイヌ民族誌』が「半側分」なのに対し、『アイヌの民具』では「四分の一」、『アイヌ植物誌』では「四、五分の一」と、一定していない[(3)]。

総じて、樹皮を丸剥ぎしないことにより樹木の立ち枯れ、すなわち資源の枯渇を防止してきたのだと理解されているようであり、このような言説は「自然と共生するアイヌ」の世界観を象徴するものとして巷間に流布しているといっても過言ではない。

一方で、筆者が調査した様々な文献や聞き取り記録では、樹皮を丸剥ぎするという記述を多く見かける。また、少なからぬアイヌ文化研究者からも「自分が古老から聞く限り、樹皮を剥ぎ残すな

どということはしないようだ」という話を聞いている。

後述するように、すくなくとも近世以前の文献には、樹皮の剥ぎ残しを裏付けるデータは確認できないことから、本稿では、「アイヌ民族は樹皮を剥ぎ残して資源の枯渇を防止してきた」という言説の形成過程を検証するというアプローチをとることにする。

まずⅠでは、丸剥ぎの事例および、その行為の意味についての古老たちの語りを紹介する。それに対してⅡでは、樹皮を剥ぎ残すという記述の例を挙げる。その中でも、アイヌ文化研究のみならず北海道における文化・言論活動全般に多大な影響を与えた更科源蔵[(4)]に注目し、この問題に関わる彼の記述の変遷を追う。Ⅲでは、更科の見解の理論的根拠について、彼の聞き取り調査ノートの分析に基づき、考察する。

なお、もとより本稿は、樹皮を丸剥ぎするのかしないのか、決着をつけるなどということを目的とするのではない。筆者の問題関心は、アイヌ文化を論じる際に、ある程度通説化している様々な言説について原典に立ち戻って再検証することにより、アイヌ文化の理解を深め、さらにはアイヌ文化像にあらたな視点をもたらすということにあり、この点では筆者がこれまで行ってきた研究の一環に位置付くものである[(5)]。

Ⅰ　丸剥ぎを示唆する記述

近世のアイヌ社会における樹皮の剥ぎ方に関して明確な情報を残している文献は、決して多くはないが、注目すべきものとしては、近世のアイヌ文化に関する基本的文献の一つとされる『蝦夷生計図説』(秦1823)がある。そこでは、「もし尋ね得る時はことごとくに皮を剥てその麁皮を去[(6)]り、中の糸筋の通りよき所をえらびとるなり」とあり、丸剥ぎが示唆されている。もっとも、この「ことごとく」という記述には二通りの解釈が可能であり、「見つけた樹は一本残らず」の意味とも考えられる。したがって、一定の留保の必要はあるが、たとえば『協和私役』にも「柏木甚多し。皆大木なり。夷人皮を剥ぎ染汁と為す。大木立枯のもの多し。惜しむべし。禁ぜざるべからず」(窪田1856：228）と、樹種は異なるものの、皮を剥ぐことによる大量の立ち枯れが指摘されている[(7)]ことから、丸剥ぎの可能性は高いと考えられる。

いずれにせよ、管見の限り、近世の記録においては、樹皮の採取の際にその一部を剥ぎ残すというような記述は確認できない。

近年の記録の中でも、樹皮を剥ぎ残したりはしないという古老の語りが、しばしばみられる。たとえば小鳥サワ氏（阿寒）は「一回皮を剥いたら、木は枯れてしまうので、木を倒すのも同じ。木を倒した方が皮が剥ぎ易い」(北海道教育委員会1999：176)と述べている。また黒川セツ氏(平取)も「皮を残したりはせず丸剥きする。皮を剥いで立ち枯れした木は軽くなるので、後で薪として利用しやすいのではないか」[(8)]と語っている。この他にも、樹皮採取を行ってきた人々から同様の証言を耳にすることは多い。

また、シナノキの例ではあるが、川上まつ子氏（平取）の語りは注目に値する。すなわち、基本

的には丸剥ぎしたうえで、日当たりのいい南側の厚い皮は煮てタテ糸として用い、日陰で皮が薄い方は沼につけてヨコ糸として用いるが、時期が遅くなると日陰の方の樹皮が剥げなくなり、結果的に片側だけしかとれなくなるのだ、というのである（アイヌ民族博物館1999[9]：153–154）。

また、織田ステノ氏（静内）は、皮は一部だけ剥いだりせずに「しっかり裸にしてしまう」と述べるとともに、「それ役目に持って来ているカムイ（kamuy　神）だから。ニカムイ（ni kamuy　木の神）にクッコレ（kut kore　帯を与える）したの見ないもの。使うために来てるニカムイだから」と語っている（アイヌ民族博物館2004[10]：16）。

筆者は、この「それ役目に持って来ている」あるいは「使うために来てる」という部分は、人間世界に存在するものは、すべて役割を持って天から降ろされているのであり、人間の役に立つことによって人間世界での生を終え、人間の感謝の言葉とともに神の国に送られることをこそ望んでいるという、アイヌの伝統的世界観に根ざしたものではないかと考える。だとすれば、衣服の材料となるために人間によって丸裸にされて枯れることは、むしろ、樹木神にとっては「エヤイカムイネレ eyaykamuynere（それによって神格を高める）」のための、喜ばしく名誉あることだという考え方も成り立つだろう。

以上のような記録を見る限り、樹皮の丸剥ぎはアイヌ社会では、すくなくとも一定の広がりをもって行われてきた行為であり、伝統的世界観に照らしても理に適ったものであると考えうる点も補足しておきたい。

Ⅱ　樹皮を剥ぎ残すという記述

しかし一方で、丸剥ぎをせずに樹皮を残すという記録が存在しているということもまた、厳然たる事実であり、むしろその点について検証することが本稿の目的である。

１　『分類アイヌ語辞典　植物編』

樹皮を剥ぎ残すという記述が確認できる最も早い文献は、管見の限り、知里真志保の『分類アイヌ語辞典　植物編』（以下『植物編』とする）であり、以下のように記されている（知里1953：166）。

> 春の雪解の頃、北海道でわ男も女も、樺太でわ専ら男が、わざわざこれを採取するために山に出かけて行き、立木から剥ぐ。剥ぐ時わ木の神に酒や幣を捧げる。これを取る時にわ幹の根もとに鉈目を入れ、それえ両手をさし込んで一気に上方え剥き上げるのである。但し、樹を裸にしないとゆう意味で皮の半分わ剥がさずにおく。

『植物編』は、刊行後50年を経た今もなお広く利用され続けている、アイヌの植物研究における基本文献だけに、その記述が与える影響は大きいと考えられる。

それでは、『植物編』の刊行当時、上記のような言説が広く見受けられるのかといえば、そうい

うわけでもない。例えば、その２年前の1951年に日本民族学会が行なった沙流川筋アイヌに関する総合調査の中で、渡辺仁がオヒョウの樹皮採取について報告しているが、そこには「適当な樹の根元をめぐり tashiro 山刀で樹皮に切目を入れ（省略）」（渡辺1951：80　傍点は本田）と、丸剥ぎを意味すると思われる記述がある。

だとすれば、『植物編』にみられる上記のような記述の論拠はどこにあるのだろうか。描写の具体性から考えて、なんらかの聞き取り調査に基づくものと考えられる。あるいは、知里が実際の採取作業に立ち会った可能性もあるかもしれない。その点を確認するために、とりあえず知里の調査記録ノートである『知里真志保ノート』（知里　不詳）を通覧したが、関連する記述を見つけることはできなかった。ただし、決して精緻とはいえない不十分な作業だったことを自覚しており、今後の課題だと考えている。

しかしここで注意しなければならないのは、知里の場合においても、それが資源の枯渇を防止するためであるとは明記されていない点である。帯を巻くという記述もない。樹皮採取に限らず、『植物編』には全編を通して、「資源の枯渇を防ぐ」という意識と結びついた記述は確認できない。

２　『ユーカラの世界』

次に注目したいのは、1964年にＮＨＫが製作・放映した『ユーカラの世界』である。高倉新一郎と更科源蔵が、監修・構成を担当した。３部作のうち、９月に放映された「夏の生活」の冒頭部にオヒョウの皮剥ぎの場面があり、以下のようなナレーションが入っている（ナレーションの聞き起こしおよび傍点は本田）。

> アイヌの人たちは木の皮を剥ぐのは、神の着物を借りるのだと信じている。まず木の神に挨拶をして煙草を供える。この木はオヒョウダモと呼ばれる。この木の皮で美しいアツシが織られ、着物が作られる。全部剥ぎ取らず、木を枯らさないように、片側だけは残しておく。

ここでは、樹皮を剥ぎ残すのは樹木を枯らさないためなのだということが、明確に述べられているが、二人の監修者のうち、高倉の著作の中では、樹皮採取に関わる具体的な記述は確認できない。

一方更科は、この問題に関わる記述を数多く残していることから、この場面およびナレーション制作への関与が推測できる。また前述のように、更科にはアイヌ文化に関する多くの著作があり、ある時期には、アイヌ文化関連の概説書、一般書、あるいは自治体史など、少なからぬ出版物が彼の著作に依拠あるいは引用を行っている。以上の点から筆者は、更科源三が言説の形成および流布に深く関わっていたと考える。以下、彼の著作について検証してみたい。

３　二つの『コタン生物記』

文献記述において、樹皮の剥ぎ残しを、丸剥ぎによる枯死を防ぐためのものであると明確に示したのは、おそらく更科源蔵が最初だったと考えられる。

更科は1976年の『コタン生物記』において次のように記している（傍点は本田）。

> 剥ぎとるときも丸裸にして枯らしてしまうというような無神経なことは決してせず、北側の皮の薄い部分は残して、「風に飛ばされるといけないから、帯をしてあげるヨ」といって剥ぎとった一部で帯のように樹幹を縛る。剥ぎとる厚い方は木の背中で、残す薄い方が腹であるという。

しかし実は更科は、1942年版の『コタン生物記』では、以下のような記述を残しているのである（傍点は本田）。

> 皮を剥がされた木は当然枯れてしまふので、この頃では材木を伐出す山へでも行つて採つて来ない限り、この布を織る原料を得ることは勿論出来なくなつてしまった。

すなわち、この段階での更科には、樹皮の剥ぎ残しおよび、そのことによる資源保護という認識はまったくみられない。

しかしその後、前述の『ユーカラの世界』の制作を経て、1968年の『アイヌの四季』には一転して以下のような記述がみられるようになった。

> この皮剥ぎは、山の樹木たちのたいせつな衣服をかりるのであるから、無神経に無造作に行うことなく、自分たちの大好きな煙草などを捧げて理由を話し、「あなたの着物の一部を貸して下さい」と祈願してから刃物を幹にあてる。そして決して丸裸にするということはなく、北側の部分は樹皮を残し、剥いだ皮の一部で帯をしめ、残った着物が風に吹きはがされないようにという、心にくいまでの心づかいをすることを忘れない。

このように、樹皮は樹木の神の衣服であるという点や、剥ぎ残した樹皮に帯をするという点が強調されている。

同年刊行の『歴史と民俗　アイヌ』においても同様の記述がみられる。

> 皮を借りる木に米や麹や煙草をあげて、木の着物を借りることを願う。樹木の着物は全部はがさず南側だけとり（北側は繊維が悪い）、残った樹皮に帯をしめて帰る。欲張って北側の皮を剥ぎとろうとして、谷にぶらさがって死んだ人がある（二風谷）といましめ、またそんな災害のないように木に向かって悪魔除けの威示踏舞（ロルンペ）をするところもある。[11]

しかし、ここでは、「北側は繊維が悪い」という解釈も付記しており、更科がそのような情報を入手していた点がうかがえる。

にも関わらず、1973年の『アイヌ文学の生活誌』では、そのような記述は姿を消し、以下のように記されるようになっている。

木を丸裸にしてしまうのではなく、必ず一部分は残した。〔中略〕はぎとった皮の一部を帯にして、これで木を縛り風のために残った着物が飛ばされないように気を使う。

そして、その３年後の1976年には、前述の新版『コタン生物記』が刊行されたのである。二つの『コタン生物記』の記述にみられる大きな隔たりは、どのような理由に基づくものなのだろうか。筆者はそれを、彼が北海道各地で行った聞き取り調査に基づく認識の変化に起因するものだったと推測している。以下、その点について考察してみたい。

Ⅲ　『コタン探訪帳』

１　樹皮採取に関わる記述

更科は、1949年の弟子屈町史の編纂を皮切りに多数の市町村史を手がけている。また、1960年代には『アイヌ伝統音楽』（日本放送協会編1965）の収集整備専門委員として調査を行うとともに、先述の『ユーカラの世界』を監修・構成した。このような事情を背景としたものと考えられるが、この時期に、道内各地でアイヌ文化に関する聞き取り調査を精力的に行っている。

そのうち1950年10月から1970年３月までの聞き取り記録ノートが『コタン探訪帳』である。350人を超える人々に聞き取りを行った膨大な記録が、19冊のノートに収められており、弟子屈町立図書館に所蔵されている[(12)]。この資料については、齋藤玲子「更科源藏氏『コタン探訪帳』の概要について　－弟子屈町立図書館所蔵ノートの紹介－」（齋藤2002）に詳しく紹介され、各ノートの調査内容も目録化されている。

ここでは、前述のような更科の認識の変化について考察するために、『コタン探訪帳』の中の樹皮採取に関わる記述を調べた。その結果、以下のような記録が確認できた[(13)]。

⑴　木の皮をはぐときはノミはしない（8-3塘路 S28女）

⑵　アツツシの材料は養老牛の方でとり温泉につけてもって来た。／とるとき祈りも何もしない（8-23虹別 S28女）

⑶　山でアツシの皮をはぐときも丸木舟の材にする木を倒／すときもなにもしない（8-185塘路 S28男）

⑷　山で皮をはぐとき「お前の着物を頂くからこれやるから」／い、といって皮のい、ところをとって帯をした（kut koru[ママ]）／ エカシカシ[ママ]がとると situ inau kar して nomi する。／「kuwa kor wa enk-~~ore~~[ママ] ta ~~un~~[ママ] isibi」とい／つてあげる。（8-135音更 S28女）

⑸　木の皮を全部とってしまったら木の皮の帯（kut）をさせる。片方のとき／はしない。（9-3名寄 S28男）

⑹　立木のま、皮をとったのには attu で帯をしめらし、倒／したものはそのま、。帯をするときは

別に何もいはない。(9–77屈斜路 S29男)

⑺　アッツの皮をとってしまふと inaikore（お礼）に皮の一部／幹にしばってやる。／山に入ったら行った晩に sirikor kamuy（桂でも何でも大／きな木）に米と麹（pusu kusuri）あげて、どうか木の皮を下さ／いといってたのむ。(10–48屈斜路 S30男)

⑻　アッツニの皮をはぐと帯だといって皮をしばる／人もあるし、片方を少しのこす人もある。／木の裏（ni ~~ttr~~ toipoke）はうすくて弱い／からそこをのこすのだ。こっちは木の腹だ　腹が／どっちに向いているかはいでみないとわから／ない。木の表（ni mekkasike）は背中／でこっちは強い。(11–48近文 S31男)

⑼　十勝の奥にアツをとりに行き〔中略〕／皮は少しのこし全部とるもんでない、少し残しておくと３年／から５年すると元のように全部皮がつく。(11–167芽室太 S34女)

データとしてはかなり断片的なものであるが、ここから次のような点が確認できる。⑴〜⑶からは、丸剥ぎか剥ぎ残すのかという情報を得ることはできないが、少なくとも、帯を与えるどころか全く祈りもしないという事例もあるということがわかる[(14)]。

一方、⑷〜⑼のように、帯を与える、あるいは樹皮を剥ぎ残すという証言もまた、決して少なくはない。

２　更科の理解

しかし、そこで述べられる「帯」あるいは「剥ぎ残し」の意味は、新版『コタン生物記』にみられるような「樹木の枯死を防ぐ」ためのものとは異なっているように感じられる。⑷以下の記述を簡単にまとめると次の表のようになる。

	皮の剥ぎ方	帯	祈り	inaw（木幣）	備考	年
⑷	?	する	する	与える	男女の違い？	’53
⑸	丸剥ぎ 片方残す	する しない				’53
⑹立木 倒した木	? ?	する しない	しない			’54
⑺	?	する		皮を inaw として？	山に行った晩に祈る	’55
⑻	丸剥ぎ？ 片方残す	する			木裏は薄いから	’56
⑼	少し残す				残すと元通りになる	’59

更科は、このような聞き取り調査を行う中、1956年の「コタン樹木誌」に次のような記述を残している。「コタン樹木誌」は北海道造林振興協会が刊行している雑誌『林』の連載記事であり、これに基づいてまとめたものが1976年の『コタン生物記』であるとされるが、実際の記述内容には相

違点が多い。

> はぎとるときにこの木の皮は下から上に剥ぎとるのであるが、とってしまうと木のもとに木弊をたてるところもあるが、女達であると剥ぎとった皮の一部で「帯をしてあげるから」といって、裸にした木にゆわいつけて、やったり、全部をはぎとらずに半分を残しておくところもある。

前掲の『アイヌの四季』や『歴史と民俗　アイヌ』など1960年代後半の叙述に較べて、聞き取りに則した文章となっているが、続いて次のような興味深い記述がみられる。

> 昔材料の豊かな時代には全部はぎとらずに、木を保護したのであると思われる、従って帯をしめてやったり、木幣をもたしてやるのは後のやり方であるかとも思うが、あるいは地方的な相異であるかもしれない。

この記述の冒頭部分は、樹皮の剥ぎ残しと樹木の保護を結びつけた記述であり注目されるが、ここではまだ推論の域を出ていない。更科はおそらく次のような仮説を導いたと考えられる。すなわち、かつてオヒョウの木が豊富に生えていた時代には次々に木をみつけることができたため、片側だけを剥ぎ取っていっても、それだけで充分な量の樹皮を採取できた。そして、そのことによって資源の枯渇を防ぐことができた。しかし、アイヌを取り巻く社会的状況の変化により自由な樹皮採取が不可能になると、一本の樹木から徹底的に剥ぎ尽くすようになった、という理解である。

さらに続く部分では、「後のやり方」すなわち丸剥ぎをする時代になってからの形式として帯や木幣が登場したのではないかという見解を示す一方で、地域差かもしれないとも述べている。この時期の更科が、このような時代性や地域性を想定していたという点は注目に値するが、「…あるかとも思うが…あるかもしれない」という表現からも、この段階の更科は丸裸にしてしまった樹木に対して帯をするという行為をどのように理解し、また位置づければよいのか、困惑していたように感じられる。

しかし、1964年の『ユーカラの世界』では、そのような推論や困惑は姿を消し、「全部剥ぎ取らず、木を枯らさないように、片側だけは残しておく（傍点は本田）」と、時代性や地域差の可能性を捨象した断定的な表現に変化している。その理由は定かではないが、1959年に、前述⑼の「皮は少しのこし全部とるもんでない、少し残しておくと３年から５年すると元のように全部皮がつく」という証言を聞き取り、樹皮を剥ぎ残すことによる「再生」に、更科なりの確証を得たのかもしれない。

もっともこの段階ではまだ、剥ぎ残した皮に帯をするという像は描かれていない。少なくとも、『コタン探訪帳』の⑸および⑻の情報に基づくならば、帯はあくまでも丸剥ぎの場合に与えられるものなのである。にも関わらず、1968年には「北側の部分は樹皮を残し、剥いだ皮の一部で帯をしめ」と記されるようになった。おそらく更科は、丸裸の樹木に与えられる帯は、かつては剥ぎ残さ

れた樹皮のために与えられたものであり、樹皮を丸剥ぎする時代になってからも、それだけが遺制として残ったものだと考えたのだろう。

３　木幣と樹皮の関係性

なお、以上のような『コタン探訪帳』の記述に則して考察するならば、更科の理解と重なる部分はあるものの、異なる理解を導くことも可能かもしれない。以下、今一度『コタン探訪帳』の記述を追ってみたい。

まず注目されるのは⑸であるが[15]、片側の皮を残した場合には帯をさせず、むしろ丸剥ぎの場合に帯を与えるというものである。すなわち帯は、剥ぎ残した樹皮の剥離を防ぐためのものではない。

それでは、帯はどのような意味を持っているのか。注目したいのは⑷の記述である。「山で皮をはぐとき「お前の着物を頂くからこれやるから」といって皮のいいところをとって帯をした」という部分は情報提供者である女性の行為だと考えられるが、後半部分はエカシ（男性古老）が樹皮採取する場合について語ったものと解釈できる。「situ inau kar して nomi する」というのは「situ inaw」という木幣を作って祈る、という意味である。その際、「kuwa kor wa enkoreta un isibi」という祈詞を唱える。kuwa は本来「杖」の意味であるため、一般的な解釈では「kuwa kor」は「杖を持つ」という意味にしかならないが、祈詞の中では、木幣が神に捧げられた状態のことを「kuwa kor」と表現する[16]。「enkota　isibi」は「早く生き返れ」の意味に解釈できる。

すなわち、男性の場合には、situ inaw を作り、この inaw を持って早く再生するように、と樹木の神に祈るということである。それに対し、女性は「皮のいいところ」を帯として与えるだけである。

⑺では[17]、明確に剥ぎ方について記述されているわけではないが、「皮をとってしまふ」という表現から、丸剥ぎの可能性も考えられる。その際、「inaikore（お礼）に皮の一部幹にしばってやる」とある。「inaikore」は「inaw kore」、すなわち「木幣を与える」という意味だと考えられ、ここでは、その樹皮は、感謝の気持ちを表明するために、イナウの代替物として樹木に捧げられている可能性がある。

さらに⑻では[18]、「木の裏は（ni toipoke）はうすくて弱いからそこをのこすのだ」という解釈も含みつつ、「皮をはぐと帯だといって皮をしばる人もあるし、片方を少しのこす人もある」という非常に示唆的なことが述べられている。つまり、帯をさせたり、皮を剥ぎ残したり、あるいは全くなにもしなかったりと様々なバリエーションはあるものの、樹木に与えられる帯と剥ぎ残した皮とは、同じ役割を果たしている可能性も考えられる。仮にそうだとすれば、残された皮は、帯と同じようになんらかの呪術的意味を持っていることになる[19]。

もちろん、以上のような理解は、異なる地域で聞き取った断片的な証言を、筆者が想定する仮説に引きつけて組み合わせた個人的解釈にすぎない。聞き取りデータの資料性を無視した恣意的利用の危険性については、従来、筆者自身が主張してきた点でもある。それゆえ、あくまでも一つの可能性として提示したものであることを断っておきたい。

おわりに

樹皮を採取する際に、その一部を剥ぎ残すという行為自体は、更科源藏の記録以前から、少なくとも一部の地域や個人にとって、再生への願いを含めた祈りの形としての意味を持ってきた可能性がある。それゆえ、知里真志保『分類アイヌ語辞典　植物編』にも、そのような記述がみられるのだと考えられるが、知里の場合は、それを樹木神に対する畏敬の念の表明として捉えていたように思われる。

しかし1960～70年代に入ると、樹皮の剥ぎ残しは、資源の枯渇防止を目的とする行為と考えられるようになっていった。

現段階の筆者は、そのような思潮の全貌を把握したわけではないが、間違いなくその中心に位置した人物の一人が更科源藏であると考える。更科は、樹皮の剥ぎ残しを樹木の枯死を防止するためだと明言した『ユーカラの世界』（1964）の制作に携わった人物である。この企画には、当時の多くのアイヌ文化研究者が関与していたのみらず、萱野茂をはじめとする多くのアイヌが制作協力者あるいは出演者として関わっており、この問題をめぐるその後の言説に大きな影響を与えたのは確実であろう。

それゆえ本稿では更科源藏に注目し、彼の調査記録ノートである『コタン探訪帳』に基づき、そのような言説の論拠について検証してみた。

その結果、『コタン探訪帳』では、樹皮の帯を剥ぎ残した樹皮に巻くという記録は全くみられず、むしろ丸剥ぎにしてしまった樹木に対して行うという証言が多くみられることが確認できた。にもかかわらず、今日では、残された樹皮の剥離を防ぐためのものだと広く考えられている。これは、更科によってそのような意味づけが行われたと考えられ、剥ぎ残した樹皮に対する彼の認識とも深く関わっているように思われる。

以下は、すでに述べたように筆者の仮説にすぎないが、更科は、本来は呪術的儀礼として行われていた樹皮の剥ぎ残しという行為を拡大解釈し、残された樹皮を、樹木の現実的再生の担保とみなすようになったのではないだろうか。その際、彼の拠りどころの一つに、「少し残しておくと３年から５年すると元のように全部皮がつく」という語りがあったと考えられるが、実はこれもまた、呪術的儀礼の枠組みの中で捉えるべきではないかと筆者は考える。

たとえば今日、植物の再生を願う儀礼としては、オオウバユリの鱗茎を採取した後で葉茎やひげ根部分を撒き散らす行為[20]や、ニリンソウの花だけを撒き散らす行為[21]などが知られる。しかし、それらはいずれも、呪術的色彩の強い儀礼が現代に伝承されることの意義が重視されているにすぎず、その現実的再生の可能性など埒外のこととみなされる場合が多い。ニリンソウの花を撒き散らすことが、資源の枯渇を防止できるなどとは決して考えないだろう。

これに対して、樹皮を剥ぎ残すことによって樹木が枯死しないということは、一定の条件の元では現実的にあり得るかもしれない。だからこそ、実際にどの程度の量を残せば樹木の生命を維持で

きるのかという点が、様々な論議を呼んできたのだといえよう。しかし、呪術的儀礼として位置づけるならば、語り手の言う通り「少し残しておく」だけで充分なのであり、剥ぎ残す皮の分量は意味を持たない。

以上の点から考えるならば、「アイヌは資源の枯渇を防ぐために樹皮を剥ぎ残し、帯をさせた」という今日人口に膾炙している言説は、更科本人によって記録された事実と異なるだけでなく、本来様々なバリエーションを有したはずの儀礼行為を、むしろ単一のイメージのなかに押し込めるもののように筆者には思われる。それは同時に、現代的な尺度に基づいて、かつてのアイヌ文化を価値づけるという危うさをも孕むものであろう。

もちろん今回の作業では、そのような言説の生起に深く関わったと考えられる更科源藏に焦点を絞り、『コタン探訪帳』という資料に基づいて考察したにすぎない。今後、様々な地方の伝承記録によって新たな知見が加わり、議論が深まっていく可能性はおおいにあるだろう。本稿の問題提起がそのような動きの引き金の一つとなれば幸いである。

最後に、本稿をまとめるにあたり、北原次郎太氏ならびに奥田統己氏から、数々の有益なご指導・ご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

⑴　ヤッについて『萱野茂のアイヌ語辞典』（萱野1996）には次のような説明がある。「木の皮：狩小屋を建てる時、屋根とか囲いに使えるぐらいの広さや長さのあるものをいう。どんな木の皮でもヤッというものではない」。

⑵　本書は『アイヌと植物』（福岡1993）に加除訂正したものであるが、同書にもこの情報の出典は記されていない。筆者が福岡氏に確認したところ、1969～1971年に旭川市が「アイヌ文化の森・伝承のコタン」を造成した際、古老たちがそう語るのを何度も耳にしており、実際に、高校生を指導していたアイヌの男性が樹皮を残したのも目撃したとのことである。

⑶　筆者が見た限りでは、後年の文献ほど、剥ぐとされる量が減少しているように感じられる。

⑷　1904～1985年。詩人、民俗学・郷土史の研究家。釧路支庁管内弟子屈町の開拓農家の生まれ。屈斜路小学校などで代用教員を務めるが、思想を危険視され馘首されたといわれる。アイヌ民族の民俗に関する著作や市町村史の執筆多数（北海道新聞社『北海道歴史人物事典』1993より抜粋）。

⑸　たとえば次の論文などを挙げておきたい。米田（本田）優子「アイヌ農耕史研究にみられる伝承資料利用の問題点―穀物の起源説話に関する検討を中心に―」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第１号1995。本田優子「ハリギリの丸木舟　民族誌資料／考古資料／口承文芸資料にもとづく一考察」『同前』第４号1998。

⑹　高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成　第四巻』所収の『蝦夷生計図説』（秦1823b）では「禾」という文字が使用されているが、東京大学所蔵の『蝦夷生計図説』（1823a）は「去」である。ここでは後者から引用した。

⑺　近世においてはこの他、日本海沿岸のヨイチ場所の林家文書において、大量の柏樹皮採取が記録されている（余市町1985）が、その用途については確認できていない。しかし一般に柏は、革鞣しや染料としての使用が知られている。たとえば胆振の早来町では、1912（明治45）年に皮革・漁網などの染料として柏皮のタンニンエキスを生産する製渋所が設置されており（永井秀夫他編2003：842）、近世においてもこのような用途だったのではないかと考えられる。

⑻　筆者の聞き取り調査による（1995/10/8）。

⑼　1985年11月聞き取りの情報である。

⑽　本書には聞き取り調査年が記載されていないが、織田氏の音声資料（アイヌ民族博物館所蔵）の活字化を担当した安田千夏氏にお訊ねしたところ、1979年6月に聞き取りされた情報とのことである。

⑾　『アイヌの民俗　上』（更科1982）にも全く同様の記述がみられるが、同書は、この『歴史と民俗　アイヌ』の文章をまとめたものである。

⑿　この他、『コタン探訪日記』１冊がある。1951年５～９月に訪れた地域について雑記風にまとめたものである。

⒀　原本では情報提供者の氏名はすべて確認できるが、個人を特定することが今回の検証作業において必ずしも重要だと思えないことから、原則として匿名にした。ただし、アイヌ文化研究においてすでに伝承者として著名で

あり、他の記録との照合が研究上有益であると考えられる数名については、実名を注記した。なおミセケチ部分は横線抹消として表わした。

⑭　ただし、このような返答があること自体、聞き取りをした側（更科）が、樹皮採取の際に何か特別な行為を行うかどうかという点に拘泥した質問をしていた可能性を示唆しているように思われる。だとすれば、この聞き取りが行われた1953年以前にも、更科がそのような情報を独自に入手していたのかもしれない。あるいは知里の『植物編』の記述を念頭に置いた質問だった可能性もある。

⑮　名寄の北風磯吉氏の語りである。

⑯　北原次郎太氏のご教示による。

⑰　屈斜路の山中酉三氏の語りである。

⑱　近文の門野ナンケ氏の語りである。

⑲　参考までに、同じく旭川の石山夫妻の語りとして次のような記録がみられる。「木の皮は、まるまる剥がさないで、片側半分を残しておく。木が細い時は、全部剥いで切り倒してしまうか、切る刃物がない時は、剥いだ皮で帯を作り、これを根元近くにしばりつける。これをクッコ゚゚ kut kore（オビを締めてやる）という」（北海道教育委員会1983：67）。ここでも、様々なバリエーションの存在がうかがえるとともに、丸剥ぎの場合に帯が与えられていることが確認できる。

⑳　様似の岡本ユミ氏は、鱗茎採取後に「turep sar as nankor na（オオウバユリの原っぱが生えるだろうよ）」と言いながら、切り離した葉茎やひげ根部分を撒き散らしている（アイヌ無形文化伝承保存会1988）。

㉑　旭川の杉村京子氏は、採取したニリンソウから花だけをちぎり取り、周囲に撒き散らしながら「来年またたくさん実つけてなってちょうだい」と祈る（アイヌ文化振興・研究推進機構2002）。ただし、ここでの「実をつけてなる」というのはもちろん果実を意味するわけではない。たとえばギョウジャニンニクの茎などに充分な澱粉が蓄えられた状態のことを「実が入った」と表現されるのと同じように、食用に適した状態に成長することを意味すると考えられる。

引用文献

アイヌ文化振興・研究推進機構

2000　『アイヌ生活文化再現マニュアル　織る－樹皮衣－』。

2002　『アイヌ生活文化再現マニュアル　食べもの』。

アイヌ文化保存対策協議会（編）

1969　『アイヌ民族誌』第一法規。

アイヌ民族博物館

1999　『川上まつ子の伝承－植物編１－』。

2004　『アイヌと植物＜樹木編＞』（第二版増補）。

アイヌ無形文化伝承保存会

1988　『アイヌ文化を伝承する人々　第１巻』＜アイヌ文化伝承記録映画　ビデオ大全集＞

萱野茂

1978　『アイヌの民具』すずさわ書店。

1996　『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂。

齋藤玲子

2002　「更科源蔵氏『コタン探訪帳』の概要について　－弟子屈町立図書館所蔵ノートの紹介－」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第11号。

更科源蔵

1942　『コタン生物記』北方出版社。

1953-1973　『コタン探訪帳』。

1956　「コタン樹木誌」『林』第55号　北海道造林振興協会。

1968　『歴史と民俗　アイヌ』社会思想社。

1973　『アイヌ文学の生活誌』日本放送協会。

1976　『コタン生物記　Ⅰ　樹木・雑草篇』法政大学出版局。

1982　『アイヌの民俗　上』更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅳ　みやま書房。

更科源蔵（文）・掛川源一郎（写真）

1968　『アイヌの四季』淡交社。

知里真志保

1953　『分類アイヌ語辞典　植物編』(『知里真志保著作集　別巻Ⅰ』平凡社　1976)。

不詳　『知里真志保ノート』北海道立文学館所蔵。

永井秀夫他（編）

2003　『日本歴史地名体系１　北海道の地名』平凡社。

秦檍丸（撰）村上貞助・間宮林蔵（増補）

1823a　『蝦夷生計図説』東京大学所蔵。

1823b　『蝦夷生計図説』(高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成　第四巻』三一書房　1969)。

福岡イト子

1993　『アイヌと植物』旭川振興公社。

1995　『アイヌ植物誌』草風館。

2001　「アイヌと植物」『平成12年度　普及啓発セミナー報告集』アイヌ文化振興・研究推進機構。

北海道教育委員会

1983　『アイヌ民俗文化財調査報告書』2。

1999　『アイヌ民俗文化財調査報告書』18。

北海道新聞社

1993　『北海道歴史人物事典』北海道新聞社。

宮島利光

1994　『チキサニの大地』日本基督教団出版局。

余市町

1985　『余市町史　第一巻』。

渡辺　仁

1951　「沙流アイヌにおける天然資源の利用」『民族学研究』16(3・4)。

Narratives of partial bark-stripping　— a study based on Sarashina Genzo's records.

HONDA Yuko

Summary :

Attus is a form of traditional Ainu clothing made from the fibers of the inner bark of trees. In the process of gathering this bark it is said that, in addition to leaving a portion of the bark on the tree, some of the stripped bark is wrapped around the remaining bark in order to prevent it from falling off. It is generally believed that, by doing so, the Ainu are conserving resources. This interpretation reinforces the popular image of the Ainu as a people "living in harmony with nature."

However one can find no data in support of this narrative in premodern sources. On the contrary, a range of written and oral sources demonstrate that completely stripping trees was common practice among Ainu communities and that this was in accord with traditional values and beliefs.

The author's research suggests that the popularization of this narrative, in which the partial stripping of trees is seen as an act of conservation, can be largely attributed to Sarashina Genzo. Accordingly this paper examined Sarashina's *Kotan tanbôchô* (a compilation of nineteen volumes of notes on his interviews with 350 traditional practitioners), in order to investigate the basis of this narrative.

The investigation determined that, while records of binding bark to trees do exist, this was done only with trees that had been completely stripped of their bark and it functioned only as a sort of ceremonial rite. The same applies to the partial stripping of bark. Thus it is clear that Sarashina took what was originally a ceremonial rite and expanded its significance by reinterpreting it as a practical means of ensuring the tree's regeneration.

Sarashina's interpretation is problematic on a number of levels. Not only do his own notes fail to support the notion that the Ainu bound bark in order to conserve resources, but such an interpretation runs forces what must have originally been a multifarious ritual into a single, fixed image. What is more, this narrative is exposes itself to the dangers inherent in evaluating past Ainu culture by the yardstick of contemporary beliefs.

key words:

Ainu, Ainu culture, *Attus*, bark of plants, Sarashina Genzo